

茨城県柿岡盆地の地形と 気温逆転及び土地利用

川喜田 純子

甚だ不満足なものながら、卒業論文をまとめることができたので、ここにそのしめくくりとして、その内容をごく簡単にまとめて紹介してみたいと思う。

本教室の卒業論文指導方針については、すでに概に示されて述べられてきているので、ここに改めて記すことは避ける。

この方針に従って決定した調査地域である柿岡盆地は、関東平野に屹立している独特の山体として知られている筑波山の東麓に位置している。

柿岡盆地をフィールドとして選んだ理由は

- (1) 盆地として一つの地域的なまとまりをもつ。
- (2) 地形的に変化に富む。
- (3) 将来の用途の余地が大きい。

等の諸点が予想できたことであり、且つ、東京から比較的近距离にあるということも有力な理由の一つとしてあげられる。

論文全体としての構成は次の様に考えた。

第一章では、本論で殆どふれなかつたいくつかの点をも含めて、調査地域の簡単な概説を試み、導入部とした。第二章、本論では四章を設け、地域の地形、小気候、土地利用の現状記載をまず行い、その後それらを相互に関連づける形とした。調査地域決定後、小気候（但しここでは気温のみ）に興味を持ち、これに一章を設けたものである。この構成自体はそれ程不都合なものとは思わないが、関連づけの章の立論が弱いため、結果的には全体の統一がなく、各章が勝手な向きをとってしまい残念に思っている。

柿岡盆地は行政的には茨城県新治郡八郷町の範囲とはほぼ一致し、約155 km^2 の面積を持ち、人口約3500人を擁す。但し、ここで対象とする地域は盆地内でも、そのほぼ中央部を南流する恋瀬川以東で、人口は約11,000人、面積約53.58 km^2 の地域である。ここで使った統計は、他の資料が非常に不確実な思われたため、やむなく昭和25年度の国勢調査によった。

盆地内は古い居住の歴史をもつが、現在は外部との交通不便などのため、後進的色彩の強い地域ということが出来る状態である。

本論の第一章、第二章で地形及び小気候を個別に取上げ、これにかなり大

さい部分をさいしたが、その意図は、それらの現象そのものの追求というよりもむしろ、後に置かれる土地利用の理解と、より高度な利用への発展の基礎をたずねることであった。ここでは正確な資料の蒐集や、その整理法が至らなかつたため、はじめのそうした意図を十分生かすことができなかった点を反省している。

地形については、国土地理院の五万分の一地形図を基図とし、その等高線や空中写真その礎を利用して作製した地形分類図に、各地形面の様相を簡単な説明として加えた。地形面は、山地、山麓の *pediment* 状緩斜面、台地（四段）、谷底平野に大分できる。紙数が限られているので各地形面の説明は省く。盆地内の地形は死年期性で、溺れ谷の発達に着しいこと、*Pediment* 状緩斜面、台地（最下段を除く）を円東ローム石が覆っていること、等の特色をもつ。日本では珍らしい侵蝕盆地の例であるともいわれている。ここで *Pediment* 状緩斜面の名はあくまでも仮称であつて、形成機構の究明とともに適当な命名のなされることが望ましいことを付記しておく。

気候は、全般的には太平洋岸地域とはほぼ同様であると思われるので、ここでは寒冷期の気温逆転現象にポイントを置いてみた。農林水産技術会議の資料と、自己の観測データを記載したが、資料の吟味も十分とはいえず、その量も少ないので、地形や更にそれを越えて土地利用との関連を掴むまでに高めることはもちろん現象そのものの把握も十分でなかつたような気がする。盆地底から周辺山地の標高 500 m 前後の地帯にかけて夜間の気温が 1-3°C 逆転するのがこの地域での状況であるが、周辺斜面の多くが林地として残されているため、土地利用とこれをつなげて考えることは困難で、その中介者として地形の果たす役割は大きいと思われる。

土地利用考察の前提として地域の経済を見ると、農業に完全に依存した形となっている。そこで、ここでは農業を主に取上げることにし、集落も省いた。本地域では土地利用率、単位面積当りの収量のいずれも低く、主要に依存する停滞的な農業経営が行われている。土地利用図を地形分類図と重ねると、谷底平野の水田化と、台地の畑地化の特色がきわめて明瞭であるが、中位以上の台地は平地林の残存も多い。畑作物として、冬の麦類、夏の陸稻、豆類、自給用の蔬菜等の他、煙草作が普及し、栗を中心とする台地上の果樹栽培とともにこの地域の農業の特色をなしている。

この地域では自然を与えられたままの姿を受けとるだけで、より高度な利用のための積極的な働きかけは従来少かつたようであるが、輸送手段の発達による商品作物増加等の社会的条件の刺激が今後の自然の利用、地域の近代

化進行への鍵となりそうに思われる。

酒匂川平野左岸に於ける 地形と土地利用

菊 地 力 三 子

目 次

序

第一章 酒匂川平野の概況

第一節 自然環境

第二節 人文環境

第二章 左岸の地形と土地利用

第一節 地 形

1) 概 説

扇状地性平野、左岸と右岸、沖積層の厚さ、
基盤岩石、西縁部地殻構造線

2) 左岸地形分類

分類と基準、各面記載

3) 地形発達史

第二節 土 地 利 用

1) 概 説

左岸と右岸

2) 土地利用

分類、土地利用別記載

結 び

神奈川県西南部に位置し、北部、東西を山地に囲まれ、南部で相模湾に臨む当平野は、相模川平野と共に、神奈川県下に於いて重要な地位を占める。地質構造上フオッサマズナの東南端部にあたり、地形的にはその成因が地溝に由来するものか否かにつき、今なお論議の的となっており、日本に数多い扇状地性平野の一つである。西部には箱根火山の裾野が伸び、その伏流水及び地形的影響とにより、日本有数の被圧地下水地帯である。相模湾暖流の影響による温暖な気候と、防衛上恵まれた地形の利とにより、人類居住の歴史